

幼児の音遊びに見る音楽的表現の変容

村上 康子

東京芸術大学大学院

本発表の目的は、幼児の音楽的な表現が変化していく過程を探ることである。子どもの音楽的な表現に関する研究は、様々な分野で数多く行われている。これらの研究は、たくさんの子どもが創り出した作品を分類し考察したものが多く。これに対して本発表は子どもの表現が変容していくその過程を追うものである。特にここでは身体的な動きを伴った音楽的な表現に焦点を当てる。その場で鳴らされた音、身振り、表情、言語表現といったものから、子どもの表現が音楽的にどのように変化するのか、そしてその背景には子どもどのような音の捉え方があるのか検討を加える。

The Change of Musical Expressions in Young Children's Music-Making

Yasuko MURAKAMI

Tokyo National University of Fine Arts and Music

The aim of this study is to see the process of which children's musical expression change. There are many researches which analyzed musical expressions of children. These researches differentiated and compared with the children's compositions and considered the development sequences. I am interested in the process of which children's expressions become change through the interaction with others. Here I focus on young children's music-making with their physical movement. I have made it clear how children's musical changes happen in their music and what kind of learning is behind it through the analysis of the sound made on the spot, their action, their look and their linguistic expressions.

1.はじめに

子どもの音楽的な表現に関する研究は、幼児教育、発達心理学等を始めとして様々な分野で数多く行われている。この中で、子ども作った音楽的作品を分析したものとしてスワニック & ティールマン (1986)、スワニック (1991)、

モレンハウアー(2001)など、の研究が挙げられよう。これらの研究は、あくまで子どもの創り出したたくさんの表現を作品の構造的側面から分類し、比較して発達の系統性を考察したものである。

これに対して筆者の興味は、他者とのかわ

りの中で子どもの音楽的な表現がどのように変化していくか、そして、子どもの表現の変化の要因、背景となるものを考察しようとするものである。

大多数の子どもの表現を比較するものではなく、対象とした子どもの表現の中にある変化を追っていくこととした。

ここでは特に、身体的な動きが伴った音遊びに焦点を当てる。遊びの場で見られた子ども達の表現の変化の過程を、音とのかかわり、他者とのかかわりを含めて分析していくこととする。その場で鳴らされた音、身振り、表情、言語表現といったものから、子どもの音遊びが音楽的にどのように変化するのか、そしてその背景には子どものどのような音に対する感受性が働いているのか検討を加える。

2. 事例研究

本発表で扱うデータは、筆者が平成14年1月より週一回東京都杉並区の幼稚園に通って得た事例である。

筆者は、朝園児たちと同時刻に登園し、園児たちと同じ活動をして一日を過ごす。特にクラス別活動の時間は、意図的な操作をすることは控えているが、子どもたちと一緒に活動する、保育に参加するなど自然なかかわりを持つよう努めている。しかし、自由な遊びの時間には音遊びが始まりやすい環境を整えており、子どもが楽器を使用して遊び始めれば、遊びが発展するようなきっかけを与えるなど、それに積極的に関わるというスタンスを取っている。

筆者は、朝登園すると、職員室に片付けられている楽器をテラスに運び出す。テラスに置く楽器は、前の週からの関連、気候等を考慮しつつ、また不協和音が響きわたることがないように、園にある楽器を選択している。

本発表で取り上げる事例は、登園からクラス

別活動に入る前の自由な遊びの時間に見られたものである。

<事例1>

(M: 年中組, 女児。R 郎: 年中組, 男児。直前まで、R 郎と筆者二人でベルを鳴らして遊んでいた。そこに M が近寄ってきたので、筆者ミュージックベルを M に手渡した。)

M, ミュージックベルのベルの部分を持ってカチカチという音を出している。M の腕の振りがだんだん速くなり、ベルの部分から手がはずれ、音が響き始める。しかし、M はそのまま腕を振りつづけ大きな音を鳴らしつづける。M が自分の鳴らしているベルの音に対して意識を払うように、筆者が「M ちゃん、いい音出して。」と働きかける。すると、M、一本のベルを両手で持って大きく腕を振って一回ベルを鳴らす。その音が減衰し消えていくところで、隣にいた R 郎もゆっくりベルを持ち上げ、勢いよく振り下げてベルを一回鳴らす。R 郎は音が減衰している間、腕をゆっくりと上げていく。R 郎が出した音が減衰し消えていくと、M 再度ベルを鳴らす。繰り返していくうちに二人でつくっていたミュージックベルのリズムはだんだん速くなっていく。

(2003年3月5日のフィールドノートより。以下日付のみを記す)

<事例1の分析>

ここで注目したいのは R 郎のベルを鳴らす動きである。M に触発されて R 郎はベルを鳴らすのだが、ベルを鳴らしている中で現れた R 郎の身振りは、腕をゆっくりと上げてから勢いよく振り下げて音を出し、さらに音の減衰に合わせて腕を持ち上げるというものであった。R 郎が持続する一音の中にある音の変化を知覚し、そ

のイメージを身体の動きで表現したものと捉えることができる。

また、繰り返していくうちに R 郎も M も身振りがだんだん大きくなり、二人でつくっていたミュージックベルのリズムがだんだんと速くなるという点は、R 郎や M が二人でベルを鳴らしているうちに、興奮し、その結果リズムが変化したと捉えることができる。異なったリズムが持つ緊張感の違いを、身体の動きと音との連動させて感じ取っていたといえよう。

< 事例 2 >

(S 子：年少組，女兒。一週間前にも筆者とミュージックベルで遊んでいる。)

S 子ミュージックベルを鳴らしながらテラスから教室へと走り回っている。しばらくして、年少組の教室でベルの音に合わせて「ソーファーソーファー」と歌い始める。観察者「もう一回、もう一回」と話しかけると、f のベルを鳴らしながら「ソ」、g のベルを鳴らしながら「ファ」と語り、さらにベルを続けて鳴らしながら「ファーソーファー〜」と歌い始める。

観察者、音名を確認させようと思い、「ちょっと待って待って……、せーの」と言って、S 子にベルを鳴らすことを促す。そして、ベルに合わせて「ソーファーソーファー」と歌う。しばらく続けると、S 子の鳴らすベルのリズムが速くなる。観察者「いい音鳴らしてね」と話すと、筆者の耳元でベルを鳴らす。観察者、耳をふさいで「キャー」と叫ぶ。

S 子再度 g・f のベルを順番に鳴らし始め、観察者それに合わせて「ソーファーソーファー〜」と歌うが、段々速くなる。

しばらくして、S 子が二本のミュージックベルをゆっくりと鳴らしながらテラスに出てくる。二本のミュージックベルのうち一音を

鳴らすと同時に左足を着地させ、音の減衰に合わせてゆっくり右足を上げだんだんと着地させる。右足の着地と同時にもう一方のミュージックベルを鳴らし、左足をゆっくり持ち上げる。また音の減衰に合わせてゆっくりと左足も着地させる。

(2002 年 3 月 6 日)

< 事例 2 の分析 >

ここでみられた S 子の表現も、一音の中にある音の変化を知覚し、そのイメージを身体的な動きで表現したものと見ることができる。持続する一音の中にある音の変化を知覚していたということであろう。また、その S 子の身体の動きから、S 子が音の中に動的なイメージを持っていたことが示唆される。

この場面で見られた S 子の動きは、非常に滑らかなものであった。この身体の動きによって表されたような音のイメージを持ちながら音を鳴らすことによって、連続する 2 音の関係性についても意識されるようになったと考えることができる。何かしらの楽曲をレガートで演奏する際には、このように、連続する二音の関係性について意識することが不可欠になると考える。既存の楽曲を演奏する上で欠かせない音のイメージであるといえよう。

< 事例 3 >

(K 男，T 男：年長組，男児。筆者が楽器を運び出すところに居合わせた K 男が、音遊びに興味を示し、楽器を鳴らしはじめる。そのうちに K 男が、「今夜はお祭りだよ。今夜は本番だよ」と筆者に語りかけてきた。その後、T 男やそのほかの子どもたちが加わり遊びが発展していく。)

K 男、「ワン、ツー、スリー、フォー」と合図を出す。観察者、筆者、K 男の合図にあわせてウッドブロックを叩き始める。T 男、足

を拍に合わせて動かしている。観察者 K と筆者の鳴らすウッドブロックのリズムが速くなってくると T 男、頭と足とを速く動かす。リズムが速くなってしばらくしたところで、K 男「おしまいっ！」と叫ぶ。観察者と筆者が楽器を鳴らすのを止める。T 男も動きを止め、しばらくじっと動かずにとまっている。

(2003 年 4 月 30 日)

< 事例 3 の分析 >

筆者達が K 男に「おしまい！」と言われ、演奏を遮られた瞬間に、T 男は身体に力をいれて身動きを全く取らない瞬間を作り出している。この動きは沈黙の瞬間を知覚し、その無音の状態に対するイメージを身体の動きで表現したものと捉えることができよう。沈黙という音のない状態によって作られた高い緊張感が感じられていたことがわかる。さらに、それを身体的な感覚と連動させて表現していたといえる。ここで感じているような沈黙の中の高い緊張感というものは、ジェネラルパウゼなどの表現には欠かせない緊張感であろう。これも、既存の楽曲を演奏する上で欠かせないものといえる。

< 事例 4 >

(D, T 明, K 男: 年長組, 男児。D が様々な楽器を鳴らし、それぞれの音色を楽しんでいた。そこに筆者が一定のリズムを D に投げかけ、それを模倣するという形で音遊びが続いている。)

筆者、D と二人、太鼓で決まったリズムを交互に叩いている。そこへ T 明がやってきて、太鼓を思いっきり叩き始める。D も T 明に負けないように、速く、そして大きな音で太鼓を叩き始める。音が混沌としてきたので、何らかの秩序を持たせたいと思い、筆者「大急

ぎで(太鼓を叩く)競争する?」と話し掛ける。すると、D「せーの」と掛け声をかけてきた。筆者も D の掛け声にあわせて「せーのっ」と言って、三人でトレモロのように楽器を叩き始める。D も T 男も太鼓を急いで叩いている時は、頭を下げ腕を大きく振って楽器を叩く。

(中略)

再度筆者が太鼓をトレモロのように叩き始める。すると子どもたちも同じように楽器を叩き始める。しばらくして、太鼓を叩くのを止めると、すぐに子ども達も太鼓を叩くのを止める。速いリズムと音のない状態との変化を楽しみたいと思い、筆者「何かいい感じ。もう一回、もう一回。」と話し掛ける。すると、D と T 明、頭を下げ速く太鼓を叩き始める。筆者も子ども達にあわせて太鼓を叩く。さらに、音を止めようと思い「せーの」と言って、片手を高く挙げ、「ジャン！」言いながら、最後に一回太鼓を叩く。筆者の「せーの」の掛け声と共に、子ども達、頭を上げる。さらに「ジャン」という時の筆者の身振りにあわせて、D 太鼓を最後に一回叩く。T 明は 2 回太鼓を叩いたところで止まる。D じっと動かず、筆者の方をうかがっている。筆者も、D と顔を見合わせて、動かずにいる。

その後、掛け声の後に何回太鼓を叩くかという遊びに変わって行く。

(2003 年 10 月 7 日)

< 事例 4 の分析 >

この事例でも、太鼓を最後に一回叩いた後、D はじっと動かず、筆者の方をうかがっていた、というように、音の無い瞬間にじっと止まっている子どもの様子が伺える。筆者からのかなり意図的な働きかけが作用しているが、子どもたちは速いリズムで、そして大きな音で楽器を鳴らすために必死で楽器を操作している。その結

果、緊張感が高まり、さらに大音量の一音をもってそのリズムが遮られ、次に音を出す瞬間をじっと待っている。

また、DもT明も共に、速く楽器を叩いている時は頭が下がっている。さらに「せーの」の掛け声の後、音を叩くというシーンでは他者と楽器を叩くタイミングを合わせるためか、頭が上がりまわりをうかがっている。このように、リズムの変化に伴う緊張感の変化を楽器の操作と関連させて感じ取っていたと考えることができる。

沈黙の中に緊張を感じていること、そしてリズムの違いが持つ緊張感の違いを感じていることがわかる。

3. 研究のまとめと今後の課題

ここで取り上げたのは、数人の子どもの事例という非常に限られた範囲のものに過ぎない。しかし、本発表で取り上げた事例から、子どもは一音の中に動的なイメージを持つことがある、

子どもは身体的な感覚と連動させて音を感じている、子どもは沈黙の中に緊張を感じている、

子どもはリズムの違いが持つ緊張感の違いを感じている、といった4点が指摘できる。

これらの事例で、子ども達が身体の動きによって表現したような音のイメージは、レガート、ジェネラルパウゼ等の奏法に直接つながるものであり、既存の楽曲を演奏する上でも欠かせないものといえる。演奏技術獲得のために欠かせないものと言え

よう。さらに、子ども達が身体の動きで音のイメージを表現していることを考えると、身体の動きと連動させて演奏指導を行うことの必要性を示唆するものといえる。

本発表では一時点の子どもの表現を事例として取り上げたが、一人の子どもを縦断的に追って行くことにより得られる視点もあろう。さらに、ここで取り上げたような子どもの音の感じ方が、実際の演奏指導の際にどのように働くのかといった視点も必要である。さらに事例分析を続け、演奏技術獲得のための指導法へと展開を図っていきたい。

引用文献

Swanwick, K. & Tillmann, J. (1986) The sequence of musical development: a study of children's compositions. In *British Journal of Music Education* 3:305-339

Swanwick, K. (1991) Further Research on the Musical Development Sequence. In *Psychology of Music* 19-1:22-32

モレンハウアー, K. (2001) 『子どもは美をどう経験するか 美的人間形成の根本問題』玉川大学出版部 (Mollenhauer, K. 1996 *Grundfragen ästhetischer Bildung: Theoretische und empirische Befunde zur ästhetischen Erfahrung von Kindern*, Juventa Verlag)